

元気 おおさか 街人

0002

堺市「すずめ踊り」

仙台で運命的な出会い

泉州のよまこい踊り隊の代表藤田純子52は、2003年、隊を率いて、仙台で開かれた「みちのくMOSS

「伝えなければ」

その踊りが、およそ400年の時を超え、杜の都・仙台市から堺市へへ帰郷した。

話には江戸時代にさかのぼる。

1603年、青葉城(仙台城)の築城を祝う宴席で、城の石垣工事に呼ばれていた職人たちが藩主伊達政宗に命じられ、即興で舞った。酒に酔い、跳ね踊る姿が、餌をついばむすずめに似ていることから「すずめ踊り」と名が付いた。

石工の舞 400年ぶり帰郷



堺まつりで、すずめ踊りを披露する普及会のメンバー。明るい舞には石工たちのドラマが凝縮されている

AKOIまつりに参加し、堺の石工だった。

阿波踊りのような軽快な囃子、太鼓の音に合わせ、熱狂的に舞う踊り子たち。

「ソレ、ソレ、ソレ」。羽に兒立てたる枚の扇子を大きく振り、跳びはねる。初めてすずめ踊りを目にした。

杜の都では毎年5月、政宗の命日を前に繰り広げられる「青葉まつり」で、「祭連」と呼ばれる踊り子隊が法被姿ですずめ踊りを披露する。

藤田は地元祭連のメンバーに踊りの歴史を聞き、驚いた。政宗に招かれた職人

は、堺の石工だった。堺の先人が創作した踊りを、仙台の人たちが400年も守り続けていてくれた。今、堺に伝えなければ、この先も伝わることはないかもしれない。運命的なものを感じた。

仙台ですずめ踊りを習い、友人らに声をかけた。仙台では、泉州・堺の石工頭4人が政宗の前で踊ったと伝えられている。それなかに堺市民は誰も知らないでいいのかわ。娘がよまこいを習っていた関係で、藤田に声をかけられた中島豊53をはじめ、主婦や会員の約40人が立ち上がった。

2枚の扇子を使うことと、足運びなどの基本動作以外は振り付け自由。軽やかに、すずめのように舞えばいい。週1回程度、小学校の体育館などを借りて練習し、地元の祭りやイベントで披露して回った。気軽に踊れると市民に好評で、「習いたい」と申し出る親子なども現れた。

「仙台では、泉州・堺の石工頭4人が政宗の前で踊ったと伝えられている。それなかに堺市民は誰も知らないでいいのかわ。娘がよまこいを習っていた関係で、藤田に声をかけられた中島豊53をはじめ、主婦や会員の約40人が立ち上がった。

「彼らの魂を踊りと一緒に、堺に戻してやりたい」。藤田は堺観光コンベンション協会などに協力を呼びかけ、昨年10月、市民らが時代装束などでパレードする堺まつりに、仙台すずめ踊り連盟のメンバー約85人を招いた。

堺の目抜き通り「大小路」で満面の笑みを浮かべ、華麗に舞う仙台の踊り子たち。「古里に帰った石工たちが、喜んで眺めている。藤田は、こみあげるものを抑えられなかった。

今年1月、「堺すずめ踊り普及会」を設立、会長は地元企業の社長を務める豊村和正(53)。藤田は副会長、中島は事務局長に就いた。会員は473歳の約140人にもなった。堺市の7行政区(区)に「祭連」を一つ以上つくり、将来は堺の顔となるようなすずめ踊り祭を開く。中島はだんじりのように踊りを市内各地に根付かせ、みんなが誇りを持つような踊りになればと胸を膨らませる。

10月に開かれた堺まつりで、堺と仙台の踊り子たちが再び、すずめとなり、舞った。「本当にすずめみたい」。一ハエー、おもしろい。働に耐え、城が完成した後、藤田や中島には沿道の声援が、昨年より大きく聞かえる理由で、帰郷を許された。

「運命的な出会い」

「彼らの魂を踊りと一緒に、堺に戻してやりたい」

地元の誇りに

踊りを広く知ってもらおう以外に、藤田にはもう一つの目標があった。

築城の喜びを表現したすずめ踊りには、石工たちの悲哀のドラマも隠されている。慣れない寒い地で重労働に耐え、城が完成した後、藤田や中島には沿道の声援が、昨年より大きく聞かえる理由で、帰郷を許された。

「運命的な出会い」

「彼らの魂を踊りと一緒に、堺に戻してやりたい」

「運命的な出会い」

「彼らの魂を踊りと一緒に、堺に戻してやりたい」

「運命的な出会い」

「彼らの魂を踊りと一緒に、堺に戻してやりたい」